

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月5日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02670

研究課題名(和文) ザンジバルにおけるスワヒリ語諸変種の記述研究 文法・語彙の差異に着目して

研究課題名(英文) Descriptive Studies of Swahili Varieties in Zanzibar - Focused on Grammar & Vocabularies -

研究代表者

竹村 景子 (TAKEMURA, Keiko)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授

研究者番号：20252736

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではスワヒリ語諸変種の文法及び語彙の記述に主眼を置き、ザンジバルにおいて数変種の記述調査を行った。先行研究ではザンジバルに大きく分けて4つの変種が存在すると言われてきたが、本研究での調査の結果、標準変種とそれら4つの変種間に違いがあるのはもちろんのこと、4変種が話されるとされてきた地域をさらに細かく見た場合、各地域変種間でも違いが見られることが確認された。また、距離的に近いからといって語彙・文法で同じ特徴を示すというわけではなく、旧来は「北部変種」と「南部変種」のようにひとくりにされ異なる特徴があるとされていた変種間でも、非常に類似した特徴を示す場合があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって得られたデータにより、少なくともザンジバルのスワヒリ語の様々な地域変種における文法や標準化にはバリエーションが見られ、形態の活用や保持の諸相も一定ではないのではないかという推論が導き出された。また、古典的な地理的分類だけでは説明しきれない変種間の異同が存在することもわかった。これらの結果から、旧来の古典的な地理的分類に頼るのではなく、ザンジバル全域において包括的に地域変種の語彙レベル、文法レベル両面の調査を行ない、詳細なデータをもとに新たな変種分類の基準を見出す必要があることを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we focused on the descriptions of grammar and vocabulary of Swahili varieties, and conducted a survey of several varieties in Zanzibar. It has been said in the previous studies that there are four major varieties in Zanzibar, but as a result of our research in this study, there are differences between the Standard Swahili and those four varieties, of course, also, in these four varieties it was confirmed that differences could be seen among the sub-regional varieties.

Additionally, closeness in distance is not the reason for showing the same features in vocabulary and grammar. It has been found that even varieties that were originally grouped together and had different characteristics, such as "Northern Variety" and "Southern Variety", may exhibit very similar characteristics.

研究分野：スワヒリ語学・文学・文化論

キーワード：スワヒリ語諸変種 記述研究 文法 語彙 ザンジバル島 ペンバ島 トウンバトゥ島

1. 研究開始当初の背景

アフリカ大陸には約 2,000 言語 (Grimes, B. F. (ed.) 1996. *Ethnologue: Languages of the World*, 13th edition. Dallas: Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arlington) によれば、2,035 言語) が存在すると言われている。欧米を中心にこれら言語の記述研究が進められてきた結果、アフリカ大陸固有の言語群の分類方法も定着しつつある。日本のアフリカ諸語研究の蓄積は残念ながら欧米から半世紀以上遅れていると言われてきたが、それでも、これまでも優れた記述言語学的研究がなされてきた (Bantu Linguistics Series(ILCAA) 等参照)。

ただ、それらの研究では、現在「危機言語」と称される少数民族の言語、それも欧米などでの先行研究のほとんどない言語を対象とすることが多かった。本研究で対象とするのは、上述の「危機言語」とはほど遠い存在と認識されている「スワヒリ語」である。古くは 19 世紀初頭にヨーロッパ人宣教師による記述が試みられ、東アフリカにおいては最も早く (1930 年) 標準語と正書法が確立された言語である。植民地期以前から植民地期を通じてヨーロッパ人宣教師、入植者、そして言語学者たちによる調査研究が行なわれており、おそらくその蓄積はアフリカ諸語の中で群を抜いている。欧米やアジアにおいてスワヒリ語を教授する教育機関が少なからず存在し、「アフリカの言語と言えばスワヒリ語」という認識が広まっていることも事実であり、スワヒリ語と他言語の辞書編纂がなされ、各言語による「スワヒリ語文法書」もあまた出版されている。このような背景から、「すでに研究し尽くされた」言語であるとの認識が広がっていると断言しても過言ではない。

しかしながらスワヒリ語研究者の宮本は、「バントゥ諸言語のなかで最も話し手人口が多く、研究が最も進んでいると見られるスワヒリ語の場合に限っても、その歴史はほとんど解明されていない。アフリカ史研究叢書の一冊として刊行された W. H. Whiteley (1969) は、「言語と文学」「初期の歴史」「内陸への拡大」「植民地期」「『標準』スワヒリ語」「独立後」「国語の諸問題」と題する 7 編の論文で構成されているが、これを見てもわかるとおり、著者の関心は、言語の内的機構と構造 (音韻・文法・語彙) の変化を明らかにするのではなく、むしろ、スワヒリ語の生態、社会史ともいべきものの究明に注がれている」(宮本正興・『スワヒリ文学の風土 東アフリカ海岸地方の言語文化誌』. 2009. 第三書館. p.290) と述べ、「スワヒリ語とスワヒリ文学の歴史を明らかにするためには、言語史と社会史の両面からの均衡のとれたアプローチが必要である。...中略...筆者の見解によれば、スワヒリ語に関して言語史と社会史からの両面アプローチの第一歩として、方言の考察と方言区画の設定が緊急である」(同掲書, p.290) と指摘している。

研究代表者は、東アフリカ海岸地域 (スワヒリ地域) での調査を十数回にわたって行ってきた。調査内容は記述言語学的、社会言語学的、社会学的なものに大別できるが、いずれの調査においても現地の人々が日常用いるスワヒリ語を聞き取ることから始めた結果、いわゆる「標準スワヒリ語」と彼らの母語である様々なスワヒリ語変種との間に、文法的にも語彙的にも大きな隔りがあることを確認できた (竹村景子. 1997. 「スワヒリ語チャアニ方言について 音韻と時制を中心に」『スワヒリ&アフリカ研究』第 9 号. pp.118-129. 大阪外国語大学. ; 竹村景子. 2002. 「一つの言語とは何か ザンジバル島における「方言」と「標準語」の間」『現代アフリカの社会変動 ことばと文化の動態観察』(宮本正興・松田素二編). pp.194-219. 人文書院)。同時に、日本の「方言の変容」状況と同様、スワヒリ語諸変種にも明らかに標準語からの影響と見られる変容が起こっており、老年層と若年層の用いる話体には明らかな差異が存在することも確認した。「標準語」の使用が拡大する一方であることから、今後、この変容が進行し、諸変種の継承そのものが危ぶまれる事態になると考えられることから、スワヒリ語の「標準語」を除く諸変種は「危機言語」とであると認識され得る。しかし、これら様々な変種についての記述研究は、日本だけでなく広く欧米を見渡した場合でも、わずかに Whiteley の *KI-MTANG 'ATA: A Dialect of the Mrima Coast - Tanganyika*. East African Swahili Committee, Makerere College, KAMPALA, 1956 および *The Dialects and Verse of Pemba - An Introduction*. East African Swahili Committee, Makerere College, KAMPALA, 1958 などが存在するのみであり、それらも「文法スケッチ」にとどまっている。包括的な文法記述と語彙収集はできていないのが現状である。一方、研究代表者はすでに以前の調査において、先行研究では同じ「トゥンバトゥ方言」が話されるとされているザンジバル島北部県のチャアニ村とキベニ村で、いわゆる be 動詞表現に差異が見られ、逆に、南部県の「マクンドゥチ方言」が話されるとされているジャンピアニ村ではチャアニ村とほぼ同様の表現が用いられることを確認した。以下、「私は学生だった」という例文を挙げる。

Ni-li-ku-w-a > Nilikuwa mwanafunzi. (標準語)
SM1sg-Pst-Inf-be-FV 学生
Ni-evu > Nyevu mwanafuzi. (チャアニ変種)
SM1sg-be(Pst) 学生
Ni-ali-ku-w-a > Nyalikuwa mwanafuzi. (キベニ変種)
SM1sg-Pst-Inf-be-FV 学生
Ni-evu > Nyevu mwanafunzi. (ジャンビアニ変種)
SM1sg-be(Pst) 学生

以上のことから、宮本が指摘したスワヒリ語研究において決定的に欠如している点、すなわち、できる限り多くの変種について「言語の内的機構と構造(音韻・文法・語彙)」に焦点を当てて徹底的な記述研究を行なうことが、日本におけるスワヒリ語研究にとって急務であるとの結論に至った。なお、多くの先行研究で「スワヒリ語の故地」と考えられているのはケニア共和国の北方海岸部であるため、そこでの調査は重要であると考えられるが、残念ながらケニアの政治状況等の関係で調査に赴くのは非常に危険であると判断した。また、タンザニア本土の海岸部での調査も急務であると考えられるが、これまでの研究代表者の調査研究からザンジバル(ザンジバル島およびペンバ島)だけでも先行研究における変種分類では極めて不十分であることが推測されるため、本プロジェクトでは調査対象地域をザンジバルに絞った。

2. 研究の目的

本研究では、スワヒリ語という言語の内的構造が「標準語」のみで研究されるべきではなく、数多くの変種が重層的且つ複合的に連鎖し合って存在する「方言連続体」であることを闡明し、先行研究(Stigand(1915)、Ingrams(1931)、Bryan(1959)、Polomé(1967)、Whiteley(1969)、Chiraghdin(1977)等)で試みられた方言区画の再確認を行なうことを目的とした。その再確認のため、ザンジバルで用いられる様々なスワヒリ語変種の文法、基礎語彙、音韻に関する詳細な記述調査を展開することとした。特に、過去時制表現といわゆる英語のbe動詞表現に当たるものについて着目し、それら変種間の統語論的差異の分析、形態音韻論的差異の分析、音韻論上の異同を把握し、最終的な目標である「スワヒリ祖語」の再構築に向けた情報の蓄積を目指した。

3. 研究の方法

研究期間は3年間で、個人による地域調査期間、共同調査期間がその大部分を占めた。具体的には、各調査地点でスワヒリ語変種の記述調査に相応しいコンサルタント数名を選定し、当該コンサルタントの母語であるスワヒリ語変種での基礎語彙600語および基礎文法の記述調査を行なった。また、それとは別に、各調査地点において「老年層」に当たる人々に対して民俗文化比較のための動植物関係語彙数百語の聞き取りと、文法記述のための一次資料としてのライフストーリーの聞き書きを行なった。

まず、2016年度には、研究代表者の竹村と研究協力者の宮崎久美子(ザンジバル国立大学)は、各対象地域においてスワヒリ語変種の文法記述にとって適当な調査地点を広く踏査し、その地域の変種の文法および基礎語彙を記述するためにふさわしいコンサルタントの獲得に努めた。コンサルタントとして、その地点から移動した経験のない老年層の女性を獲得した。同一の文法調査票および基礎語彙票を用いて、まずは当該変種のアウトラインを把握することを目指した。住み込みによる参与観察とインタビューを基本としたが、ダルエスサラーム大学およびザンジバル国立大学での資料収集、調査研究も実施し、現地研究者との交流をはかった。さらに、スワヒリ地域の民俗文化に見られる同質性と異質性を明らかにするため、「民俗文化比較のための語彙調査票」を用いて、動植物関係の語彙に見られる「方言的種々性」を把握することを目指した。スワヒリ地域はインド洋文化圏の西端に当たり、インドネシアやマレーシア等と同様に「ココヤシ文化」を保有し、また、豊富な魚介類を誇る漁場でもあることから、これらの植生や海洋生物に関する語彙が人々の暮らしに深く根付いている。南北に細長いベルト地帯であるスワヒリ地域で、これらの語彙がどのように分布しているのかを詳細に記述すべく、データ収集を行なった。

研究代表者は、主にザンジバル島北部とペンバ島北部の村落部の変種を記述することに努め

た。先行研究において「スワヒリ語諸変種」の中の「南方変種」とひとくくりに認識される両島の諸変種にどのような差異があるのかを明らかにする端緒とするため、ザンジバル島の北西に位置するトゥンバトゥ島、ザンジバル島北部地域一帯、およびペンバ島南部で話されるとされる「トゥンバトゥ変種 (Kitumbatu)」が、それらの域内で「下位変種」を持つのか持たないのか、文法、音韻、語彙に差異はないのか等を検討するためのデータ収集を行なった。研究協力者の宮崎は、ザンジバル島東部と南部のいくつかの村落におけるスワヒリ語変種の記述に努めた。先行研究ではこれらの地域で「ハディム変種 (Kihadimu)」と呼ばれる変種が話されているとされるが、北部同様、それらの域内で「下位変種」が見られるかどうかを詳細に調査した。

続く 2017 年度には、各自の調査結果を基に、同一調査地域においてさらに詳細な調査を展開した。特に文法については、基礎文法の調査票では網羅することのできなかった細かい点（具体的には、スワヒリ語の属するバントゥ諸語に特徴的な動詞派生の種類と用法、テンス・アスペクトの種類と構造、関係節の種類と用法、名詞修飾における修飾語の語順等）について、調査参加者全員での検討を経て調査項目を決定し、それを用いた調査を行なうことでより発展的且つ詳細な記述に努めた。

最終年度の 2018 年度には、竹村と宮崎が 2 年度分の調査で得た成果を持ち寄り、既調査地域のスワヒリ語変種がどのような関係性を持っているかについて比較検討を開始した。従来の先行研究で指摘された「スワヒリ語諸変種」の分布と合致するのかどうか、また、「下位変種」の存在が認められるかどうかについての議論の端緒についたと言える。加えて、各自が初年度と同一調査地域に赴き、未調査だった項目に着手するとともに、より詳しい文法項目についての記述を試みた。

4. 研究成果

2016 年度は、竹村はザンジバル島北部県北部 A 郡に位置するチャアニ村を拠点として、同村に居住している、トゥンバトゥ島出身者を調査協力者として記述調査を行なった。本調査協力者はトゥンバトゥ島内のゴマニ地区出身者であるため、より正確を期すという意味では、「トゥンバトゥ - ゴマニ変種」の記述調査を行なったと記すべきである。パイロットデータとして基礎語彙 600 語を収集し、文法については、「人称変化・人称代名詞」、「名詞の性・クラス・数」、「名詞の定・不定」、「時制の種類」、「動詞」についてある程度のデータ収集ができた。

語彙に関しては、元々はトゥンバトゥ島出身者が建設したと言われるチャアニ村で話されている「チャアニ変種」と比較しても違いが見られ、「見る」、「話す」、「取る」などの日常語のレベルにおいても違いがあることがわかった。また、「チャアニ変種話者」には発音できない子音も存在しており、音声・音韻のレベルでの調査が必要であることもわかった。

文法に関しては、特に「過去時制表現」において「標準語」との大きな違いが存在することが確認されたが、さらに、「チャアニ変種」と比較した場合でも細部においては違いが存在することが予測できるデータが採れた。特に、英語のいわゆる be 動詞表現においてその違いが顕著であることが判明し、この点に着目して近隣村落でもデータ収集を行なう必要性が確認された。

2017 年度も竹村は前年度に引き続きザンジバル島北部県北部 A 郡においてスワヒリ語変種の記述調査を行なった。本調査協力者は昨年度同様にザンジバル島北西に位置するトゥンバトゥ島ゴマニ地区出身者で、ザンジバル島チャアニ村在住者である。タンザニアにおける調査許可申請のプロセスが非常に厳しくなったため、ザンジバル島においても同様の手続きが要求され、現地入りしてから本調査開始までに相当の時間がかかった。それにより、予定していたチャアニ村近隣村での文法記述調査を断念し、前年度に終えられなかった「トゥンバトゥ - ゴマニ変種」の文法記述を精力的に行なった。「アジア・アフリカ諸言語のための文法調査票」に基づき、「習慣」、「完了」、「経験」、「開始・終了等」、「比較等」、「格と強調」、「提示等」、「並列」、「動詞の用法」、「可能」、「希望」、「必要・選択」、「命令と禁止」、「勧誘」、「固有名詞」、「質問」、「複文」、「条件文・譲歩文」、「時間関係」、「重文」、「自動・他動と使役」、「受身」、「数詞等」、「修飾語の順序」、「場所」、「連体修飾節」、「身体部分」、「天然現象」、「引用」の各項目についてデータ収集が完了した。このうち、「連体修飾節」については、いわゆる英語の関係節に当たる表現において標準語ともチャアニ変種とも異なる文法特徴を示すデータが収集できたことが非常に興味深い。また、語彙の面でも、前年度に収集した基礎語彙 600 語ではカバーしきれなかった動詞について、文法記述のたなっており、今後の調査においては特に様々な時制と共起させてさらに詳細を把握する必要があることがわかった。なお、調査協力者の宮崎氏は、同様の調査をザンジバル南部県のジャンピアニ村の「ジャンピアニ変種」Kijambiani とバジェ村の「バジェ変種」Kipaje に対して行っており、先行研究で「ハディム方言」Kihadimu や「マクンドゥチ方言」Kimakunduchi とひとくくりにされているこの地域の変種同士が、北部県での状況と同様に、語彙レベルでも文法レベルでも差異を示すことが確認された。

2018 年度も、ザンジバル島におけるスワヒリ語諸変種の記述調査に従事した。竹村は引き続きチャアニ村在住のトゥンバトゥ島ゴマニ地区出身者に調査協力を依頼した。さらに、北部県

の最北端であるヌングィ村と、チャア二村の北東に位置するキベニ村にも赴き、語彙レベルおよび文法レベルでの差異を確認した。また、研究協力者の宮崎は、「ジャンビアニ変種」および「パジェ変種」の記述調査を引き続き行なった。研究代表者・協力者ともに、前年度までに収集したデータの不足分の収集と、すでに収集したデータにおける疑問点を解明することを目指した。これらのデータを元に2つの国際学会で研究発表を行った。1つは第7回国際バントウ諸語学会（南アフリカ共和国ケープタウンにて開催；2018年7月10日）において行なった“Dialectal Variation in Swahili: on the Lexicon and Grammar -”であり、もう1つは第9回世界アフリカ言語学会議（モロッコ王国ラバトにて開催；2018年8月26日）において行なった“Towards a new approach to ‘Viswahili’ in Zanzibar”である。いずれの発表においても、参加者から多くの有益な質問とコメントが寄せられ、本研究に対する関心の高さがうかがえた。また、研究代表者・協力者ともにメンバーとなっている東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のプロジェクト「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」の研究会においても、「ザンジバルにおけるスワヒリ語諸変種の関係を探る新たな試み」と題した発表を行ない（東京外大AA研；2018年10月13日）、プロジェクトメンバーから本研究の継続が必須であるとのコメントが得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

TAKEMURA Keiko & MIYAZAKI Kumiko. 2019. “Utofauti wa Kilahaja wa Kiswahili - Kutokana na Data Zilizokusanywa Kisiwani Unguja -”. *Journal of Swahili & African Studies*. 30:67-80. (査読無)

TAKEMURA Keiko. 2018. “Nini ndiyo ‘Lugha’ - Kuzingatia Tofauti baina ya ‘Lahaja’ na ‘Kiswahili Sanifu’ Visiwani Zanzibar -”. *Journal of Swahili & African Studies*. 29:167-187. (査読無)

竹村 景子. 2018. 『ザンジバルとの30年 チャア二村滞在雑記』『アフリカ文学研究会会報 MWENGE』. 44:68-71. (査読有)

TAKEMURA Keiko. 2017. “Miundo ya Sentensi za Njeo Iliyopita katika Kitumbatu-Gomani: Kwa Kulinganisha na Kichaani na Kiswahili Sanifu”. *Journal of Swahili & African Studies*. 28:109-121. (査読無)

〔学会発表〕(計2件)

MIYAZAKI Kumiko & TAKEMURA Keiko. “Towards a New Approach to ‘Viswahili’ in Zanzibar”. @ The 9th World Congress of African Linguistics (in Morocco). 2018.

MIYAZAKI Kumiko & TAKEMURA Keiko. “Dialectal Variation in Swahili: on the Lexicon & Grammar”. @ The 7th International Conference on Bantu Languages (in the Republic of South Africa). 2018.

〔図書〕(計1件)

竹村 景子. 2018. 『ニューエクスプレスプラス スワヒリ語』. 白水社. 163p.

6. 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：宮崎 久美子

ローマ字氏名：MIYAZAKI, Kumiko

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。